

橋詰空間を活用するウォークブル滞留空間 創出の検討

2024 年 3 月

はじめに

この冊子は、千代田区が区内の大学を対象として研究助成をしている令和 5 年（2023 年）度の千代田学事業により、法政大学エコ地域デザイン研究センターが研究を進めとりまとめたものである。事業採択時の研究題目は「橋詰空間を活用するウォーカブル滞留空間創出の検討と運営実験」としていたが、事業の進捗度合いを勘案し、運営実験の部分を割愛して、検討までに止めざるを得ない結果となった。

令和 5 年（2023 年）度の千代田学事業では、募集テーマ「ウォーカブルなまちづくりの検討」のもと、「千代田区ウォーカブルまちづくりデザインが示す考え方のもと、道路等のパブリック空間を地域課題等に応じ、地域が主体となって、ゆったりとくつろいだり、様々な活動を行ったりする場所へとする施策提案を求める。」とされた。法政大学エコ地域デザイン研究所は、テリトリー概念のもと、特に水辺のまちづくりを中心テーマとして取り組んできていることから、千代田区内の川沿いに着目し、与えられたテーマであるウォーカブルまちづくりについての検討を行った。対象地は提案時には日本橋川右岸側の広幅員歩道としていたが、その場所が首都高速道路の補強工事で使われだしたこともあり、企画段階で着目していた日本橋川錦橋左岸橋詰広場に対象地を変更した。それらに時間を要したこと、またもとより道路敷での社会実験については一定の準備期間が必要なことで、今年度事業においては運営実験までには至らなかったものである。

結果、本事業ではウォーカブル滞留空間としての橋詰広場利用に向け、対象地の詳細な現況図を整え、また周辺の来街者に対して当該場所に関する期待などの聞き取り調査を行った。この成果を踏まえ、次の段階ではこの橋詰広場の適切な再整備、そして滞留拠点としての活用に向けた諸取り組みが引き続き展開されることが期待される。

2024 年 3 月

法政大学エコ地域デザイン研究センター

I 事業の背景と目的

1. 事業の経緯

ウォーカブルまちづくりについては国が提唱していることもあり、全国約 300 の自治体が名乗りをあげ、半ば狂信的に検討され、社会実験が進められている。当事業についてもその一環であることは確かではあるものの、実は当研究にはやや長い経緯がある。現在（公財）都市づくりパブリックデザインセンターにおいて、「アーバンパブリックスペース研究会（UPS 研究会）」がおかれ、国土交通省をアドバイザーに迎えつつ、自治体、関係するコンサルタント会社等が集まって、ウォーカブルまちづくりの組織的な検討がなされている。当研究の代表研究者は、この UPS 研究会の 3 つの部会の一つを任されている訳であるが、UPS 研究会には前身がある。これは（公社）日本都市計画学会認定社会連携組織「APS（Action for Public Space）推進会議」といい、この APS 推進会議には「千代田部会」が置かれ、主として日本橋川沿いの地域に着目して歩行者にとって快適なまちづくりを検討していた。当事業は同推進会議が提唱した整備のあり方を実践に移すために実施しているものでもある。

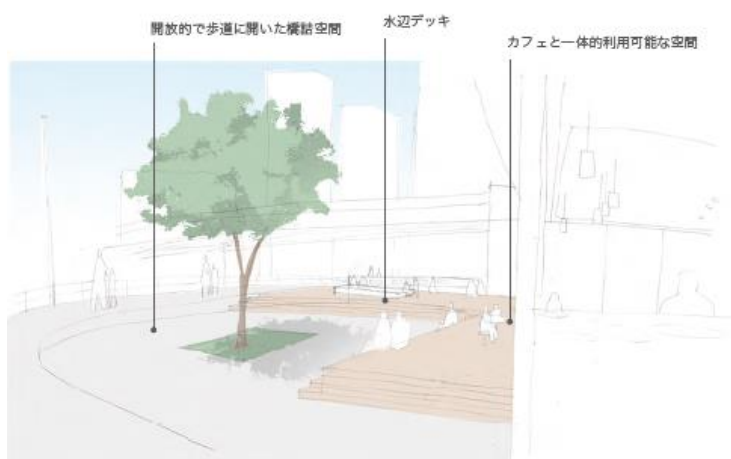
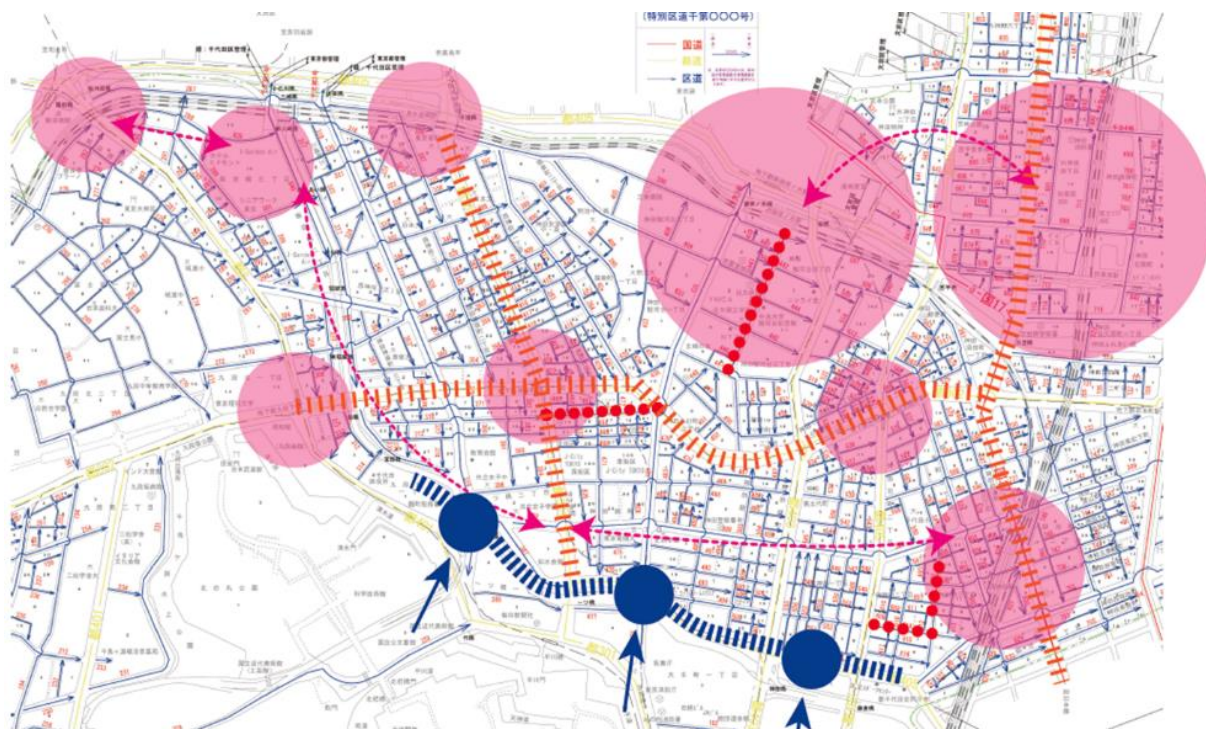


図 I-1 APS 推進会議時代の提案図(2017 年)

2. 事業の狙い

図 I-2 に見られる通り千代田区の水道橋～お茶の水～秋葉原から南側の地域については、広幅員歩道を持つ道路がネットワークされ、それらに囲まれるブロック内の細街路沿いに多様な都市機能が展開し、総じてウォーカブルなゾーンとなっているが、靖国通りを超え、日本橋川までのゾーンについては、靖国通り以北に比して、そういった傾向は弱い。千代田区ではそのような状況に対し区道である神田警察通りにおいてウォーカブル施策を展開中であるが、当事業はそれをさらに日本橋川沿いまで引っ張るために、日本橋川に係る橋の橋詰空間に着目してここに歩行者の滞留場所を創出しようとするものであ

る。



秋葉原，御茶の水から靖国通りまでのゾーンは相当程度ウォーカブルなゾーンになっているが，その先，日本橋川方面の目的地が欲しい。

図 I - 2 千代田区北東部のウォーカブル空間の現状と課題

Ⅱ 関連検討について

1. 日本橋川沿川まちづくりの方向性

※APS 推進会議検討より必要箇所の抜粋

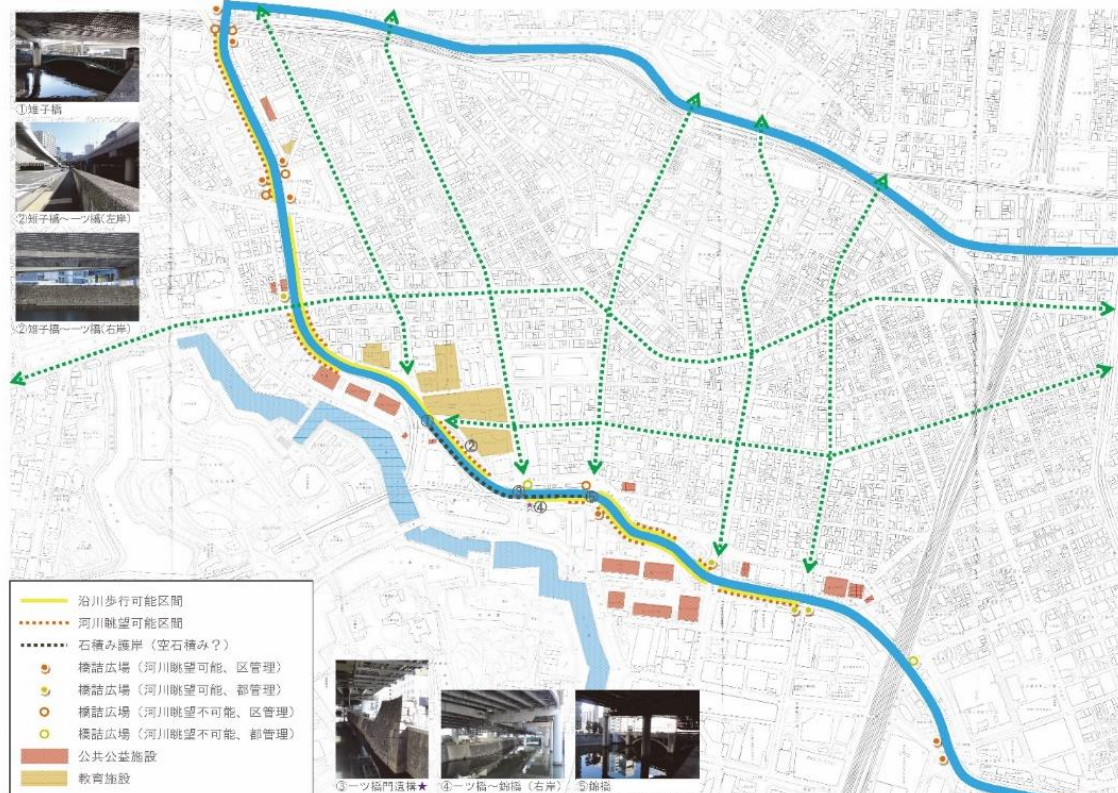
1) 一体感のある流域の創出

- ・日本橋川流域では、開発単位、整備単位ごとに、護岸・パラペット・防護柵・植栽・舗装・照明柱等のデザインが異なり、流域としての一体感があるとは言い難い。
- ・また、左岸と右岸で、護岸のデザインが異なる区間もある。
- ・これらの施設については、流域全体で一定のルールを設定し、整備にあたりそのルールに則ること
- で、一体感のある流域を創出することが望ましい。

2) 沿川の歩行空間の連続性の確保と歩行空間の質の向上

- ・大手町地区の川端緑道をはじめ、日本橋川沿川の歩行空間の整備が進んでいる。
- ・しかし現状では、そもそも沿川を歩くことができない、あるいは横断歩道を渡るために迂回する必要があるなど、上下流を連続して歩行することは容易ではない。

＜参考＞日本橋川沿川土地利用等調査結果



図Ⅱ－１ 日本橋川沿いのまちづくり要素

出典：APS 推進会議資料

- ・また、沿川に資材置場が設置されていたり、無粋なコンクリート護岸が設置されていたりするなど、必ずしも歩行空間の質が高いとはいえない。
- ・日本橋川を東西の軸として位置付け、回遊性を高めるためには、こうした歩行空間の連続性の確保と質の向上が欠かせない。

3) 河川及び沿川空間の一体整備と沿川街区における建築の誘導

- ・かつての江戸では、河川とその沿川空間、さらに沿川街区は、一体的に設計され、それらが水辺の賑わいを生み出していた。
- ・そうした水辺の賑わいを創出するため、日本橋川を軸として、水辺を強く意識して、沿川空間及び沿川街区の建築を誘導することが望ましい。

4) 対岸への配慮（対岸を望む視点場の確保、対岸からの視対象としての意識醸成）

- ・水辺の大きな魅力は、水面越しに対岸の眺望を楽しむことにある。
- ・そのためには、対岸を望む視点場を確保するとともに、対岸からの眺望にも配慮することが肝要である。

5) 橋梁及び橋詰空間の魅力向上

- ・水辺の視点場として、賑わいの場として、あるいは日本橋川をはさんだ兩岸の地区をつなぐ結節点として、橋梁及び橋詰空間の魅力を高めることが望ましい。

6) レガシーの継承と創出（護岸、御門、橋梁、橋詰広場、河岸等）

- ・日本橋川沿川には、江戸城の門跡や震災復興橋梁など、江戸以来の多様な歴史資源が集積している。
- ・これらは、まちの個性を彩る歴史資源にほかならず、そうしたレガシーを継承するとともに、後世に引き継ぐことを念頭に、新たなレガシーを創出することが望ましい。

7) 産学官民の連携体制の構築、維持管理・運営に係わるマネジメント体制の構築

- ・日本橋川沿川には、民間住宅のほか、大手町や神田、九段下や飯田橋に集積する企業群、さらに官公庁や教育機関など、多様な主体が立地している。
- ・そうした産学官民の連携体制を構築するとともに、維持管理・運営に係わるマネジメント体制を構築することが望ましい。

8) 特色ある地区・ゾーンの創出と接続

- ・日本橋川沿川には、個性ある多彩な地区・ゾーンが連なっている。
- ・日本橋川の水辺をいかして、これらの地区・ゾーンの個性を引き立たせるとともに、日本橋川を軸

として、これらの地区やゾーンを接続することが望ましい。

2. 事例調査

当事業と同じ時期に平行して実施されてきた公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター内に置かれた研究組織であるUPS（Urban Public Space）研究会の活動と連携し、ウォーカブルまちづくりの先進事例についての情報収集を行った。

1) 長野市セントラルプラザ

長野市においては、長野駅から善光寺に向かう都市軸ともいべき骨格的な道路（表参道）に沿って、ウォーカブルなまちづくりが展開されている。しかしながら長野駅と善光寺は道路距離にして約2kmほどあるため、これを一気に歩くのは困難である。この表参道に沿っては、中間的な位置において市による再開発事業が完成しており、その前庭としての広場も作られている。

さらに今回長野市では、表参道沿いの比較的規模の大きい民有地に着目した。この場所は1998年の長野オリンピック時にメダル授与会場として使われた場所で、その後青空駐車場として利用されてきた。この度この民有地を取得し「セントラルプラザ」として整備したものである。施設はトイレ等の便民施設、野外ステージ、広場そしてオリンピックの記念ボード（図Ⅱ－2）からなるが、着目すべきは芝生広場・噴水広場（図Ⅲ－3）である。長野市の都心の目抜き通り沿いに作れたこの大きな芝生の空間は、親子づれなどがくつろぐ空間として活用されている。ウォーカブルというが、そう歩いてばかりは居られず、滞留・休息の空間が必要であることが良くわかる。



図Ⅱ－2 オリンピック記念ボード



図Ⅲ－3 芝生広場と噴水広場

2) 東武動物公園駅及び周辺

もう一つの事例は、東武動物公園駅とその周辺である。地元宮代町では、この駅と駅から南西に約600mにある東武動物公園までの間を町民のためのウォーカブル空間として整備し、また様々なソフト施策を展開している。この中間点には町役場があり、また役場と駅の間には、象設計集団の設計で知られる「新修館」というコミュニティセンターがあり、その前庭もある。このように比較的短い都市の軸に駅～新修館～町役場～東武動物公園があり、さらに南に「新しい村」といった自然環境豊かなゾーンも形成されている。

この地区での着目点は駅周辺整備(図Ⅱ-4)である。宮代町、東武鉄道、そして良品計画による駅、駅前広場、隣接商業施設そしてこれと一体となった芝生広場からなる開発である。図Ⅱ-5にみられる通り、この芝生広場、そしてそこに商業施設から延びる大屋根の効果は絶大であり、ウォーカブルまちづくりにおいて滞留空間が有効なことが良くわかる。

図Ⅱ-4 駅、駅前広場、商業施設の一体開発



図Ⅱ-5 芝生広場と大屋根

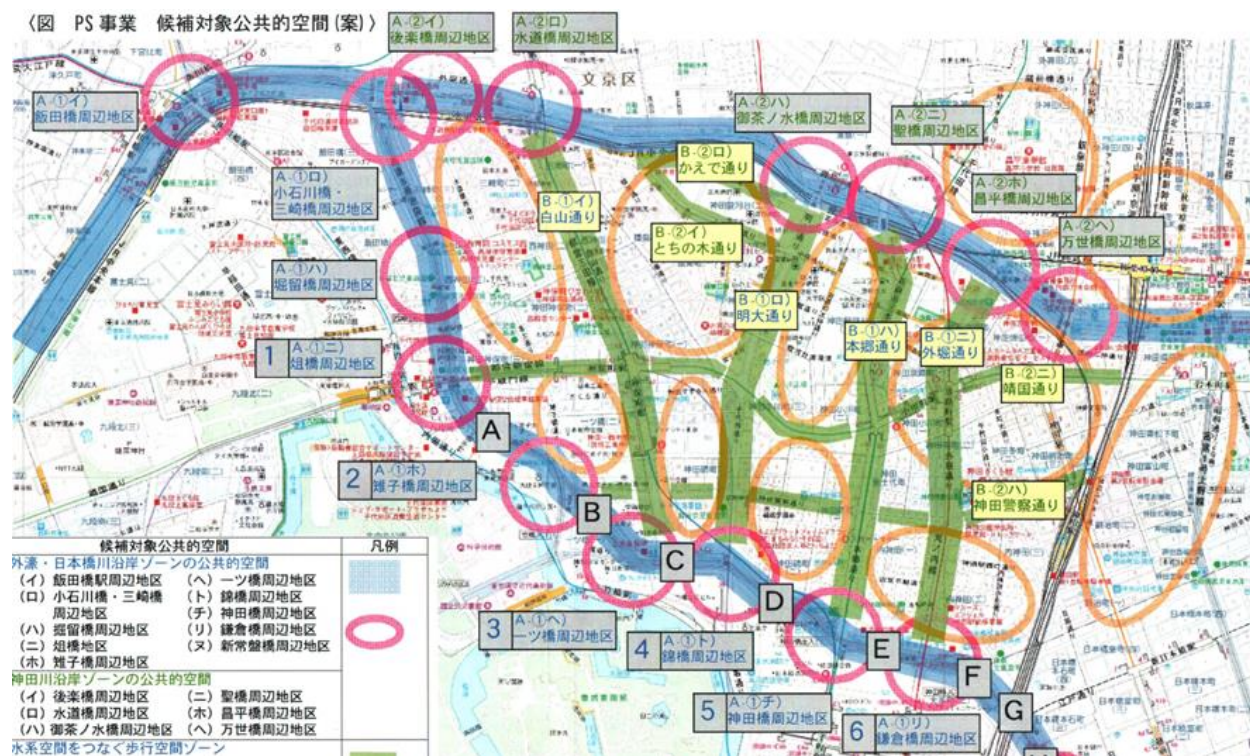


Ⅲ ウォーカブル滞留拠点の選定と現状把握

1. 対象地について

ここでの取り組みは、JR 中央線の各駅、すなわち秋葉原、お茶の水、水道橋、飯田橋の各駅から南向きの市街地におけるウォーカブルまちづくりの展開であり、その観点からみると、概ね靖国通りまでの区域については幹線道路の広幅員歩道、また比較的交通量の少ない裏道での歩行者が優先された歩行環境など、全国的にみてもかなり良好なウォーカブルな都心地域が創出されていると言える。

一方靖国通りを超えると様相は少々変わり、道路等の都市基盤の状況は靖国通り以北と変わらないにも係わらず、人影は少なくなる。これはウォーカブルといっても要は道路空間の造りが重要なのではなく、沿道土地利用であるとかの歩行者にとっての目的地が重要であることを示している。この観点から、前記の通り、日本橋川に着目し、この川沿いに町を歩く人の目的地、また休憩の場を提供することで、ウォーカブルなエリアの拡大を狙うものである。かつて APS 推進会議では日本橋川沿いの整備の方向について詳しく検討し、その橋詰についても個々に吟味し、理活用の方について整理した（図Ⅲ－１）。

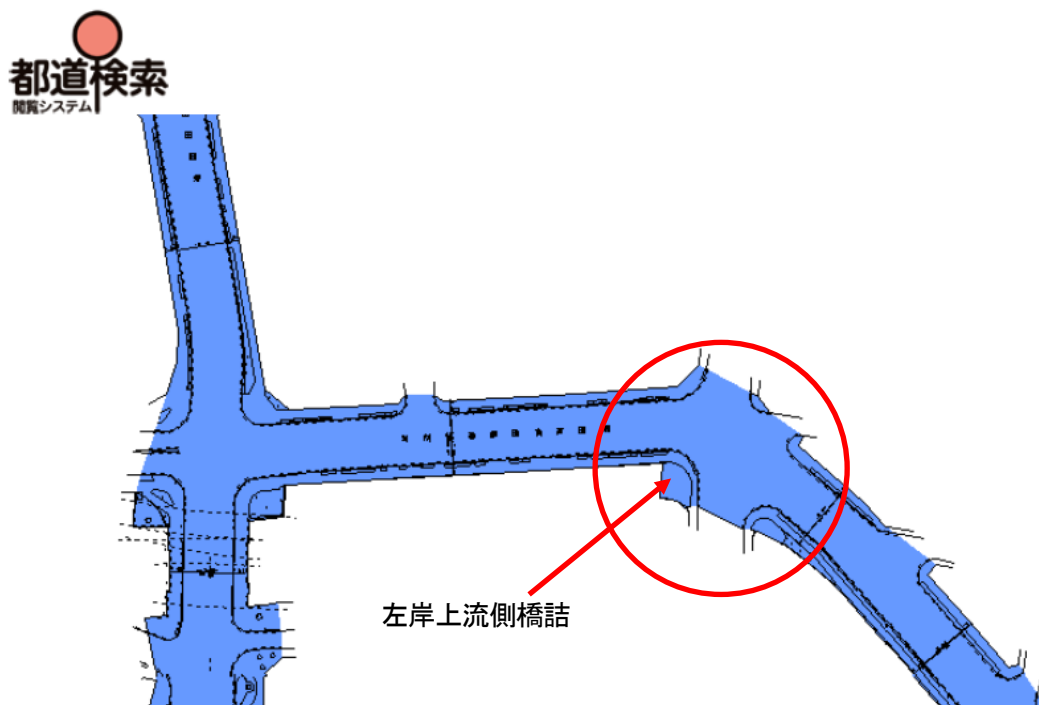


図Ⅲ－１ 日本橋川沿い各地点の整備の方向性検討の例

出典：APS 推進会議

このため、当事業（千代田学）の企画段階では、過去のこの検討成果を踏まえ対象地を錦橋左岸上流側橋詰としていた。しかしながら企画提案の段階で、千代田区よりこの場所について現在は都管理に戻っているのを、柔軟な利用には条件が多いのではないか、との指摘がなされた。このため、当事業の提案書においては、滞留拠点の検討場所は、その対岸の少し上流部にある川沿いの広幅員歩道としていた。この場所は、道路を挟んで南側に展開された丸紅ビルの建て替えにおいて、この建物建設における地域貢献として、反対側歩道さらには隣接する KKR 東京ビルに接する道路の部分まで、丸紅開発により歩道整備がなされたものである。

さらに当事業の具体化を進める段階で、地域の由来であるとか整備歴などからのアドバイスをということで、提案書に共同研究者と位置づけていた、日本大学の大沢教授と対象地について意見交換を行う中で、橋詰広場の底地、上物、管理の状況が明らかとなった。底地については図Ⅲ－２にみられる通り、都道敷であることが確認された。上物（植樹、工作物など）については各所への聞き込みからかつて千代田区が都から占用のような形で整備をして、一時期区が管理していたものと分かった。これが上物についても平成 27 年度に管理を都に返還してしまったため、企画段階での区からのアドバイスに指摘になったものと判明した。



図Ⅲ－２ 錦橋周辺の都道敷の状況

出典：都道検索閲覧システム

また大沢教授の紹介で、この地域の都道を管理する東京都第一建設局の方と面談をして頂けた。私た

ちの研究の狙いなどをご説明し、具体的にアクションを起こす場合にはまた別途正式な調整が必要であるものの、大学の研究所での研究の題材程度であれば進めて良いのではないかと感触を得た。なお同建設局に置かれても橋詰についていろいろ考えておられるようで、表Ⅲ－１に示すような資料も頂いた。

表Ⅲ－１ 都道橋詰の占用状況

資料提供：東京都第一建設局

日本橋川 橋梁 橋詰占用状況

橋名	箇所	占用物件	占用者
鎌倉橋	—	なし	—
神田橋	左岸 上流	神田橋公衆便所 神田橋公園	千代田区
一ツ橋	左岸 上流	一ツ橋公衆便所	千代田区
俎橋	右岸 上流	児童遊園	千代田区

また、現地を確認している間に、提案書において対象地としていた右岸の広幅員歩道周辺では、首都高速道路の補強関連と思われる工事が始まり、ウォークブルの滞留拠点という雰囲気ではなくなっていた（図Ⅲ－３）。これらのことから、当事業の対象地は錦橋左岸側の橋詰広場とし、都の道路台帳も参考として上流側に加え下流側も見ておくこととした。

図Ⅲ－３ 日本橋川右岸側広幅員歩道上での工事の状況



2. 対象地の現状把握（見学と実測）

このような経緯を経て、とにかく今後いろいろと行動を起こすにしても、現状を正確に把握することが重要であると考え、研究室のゼミ生を繰り出し、詳しく現地を調査、実測し、図面を起こすこととし

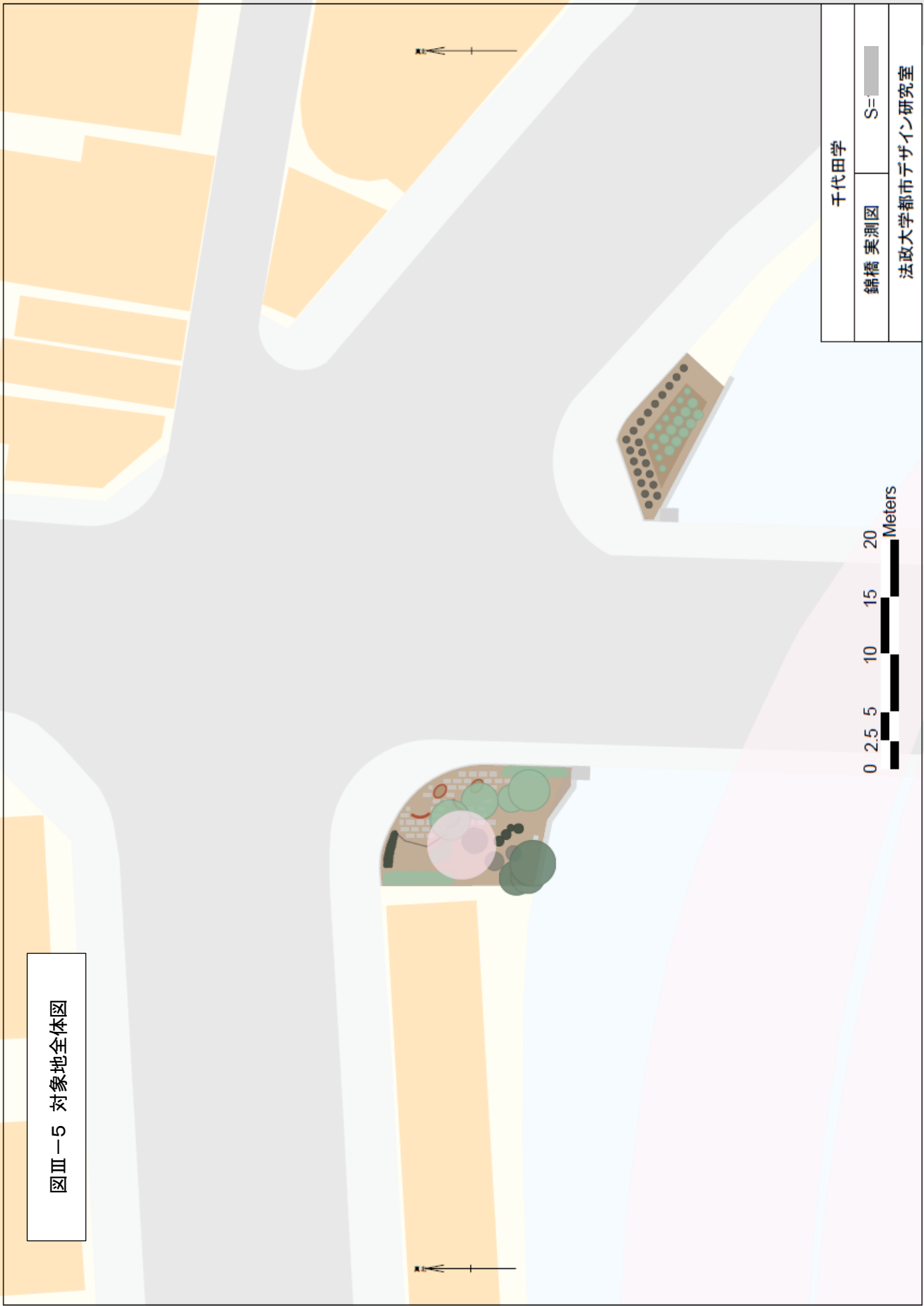
た。対象地は現状でも公開された空地として供用されているため、他の利用者がいない時間を狙って写真撮影し、また必要な箇所についてレーザー距離計などを活用して計測することで、実測図を作成した（図Ⅲ－５、６）。なお、当報告書の印刷の都合上、全体図としての図Ⅲ－５は縮刷されているが、この図を A2 判に印刷すると 1/200 のスケールとなるよう調製している。

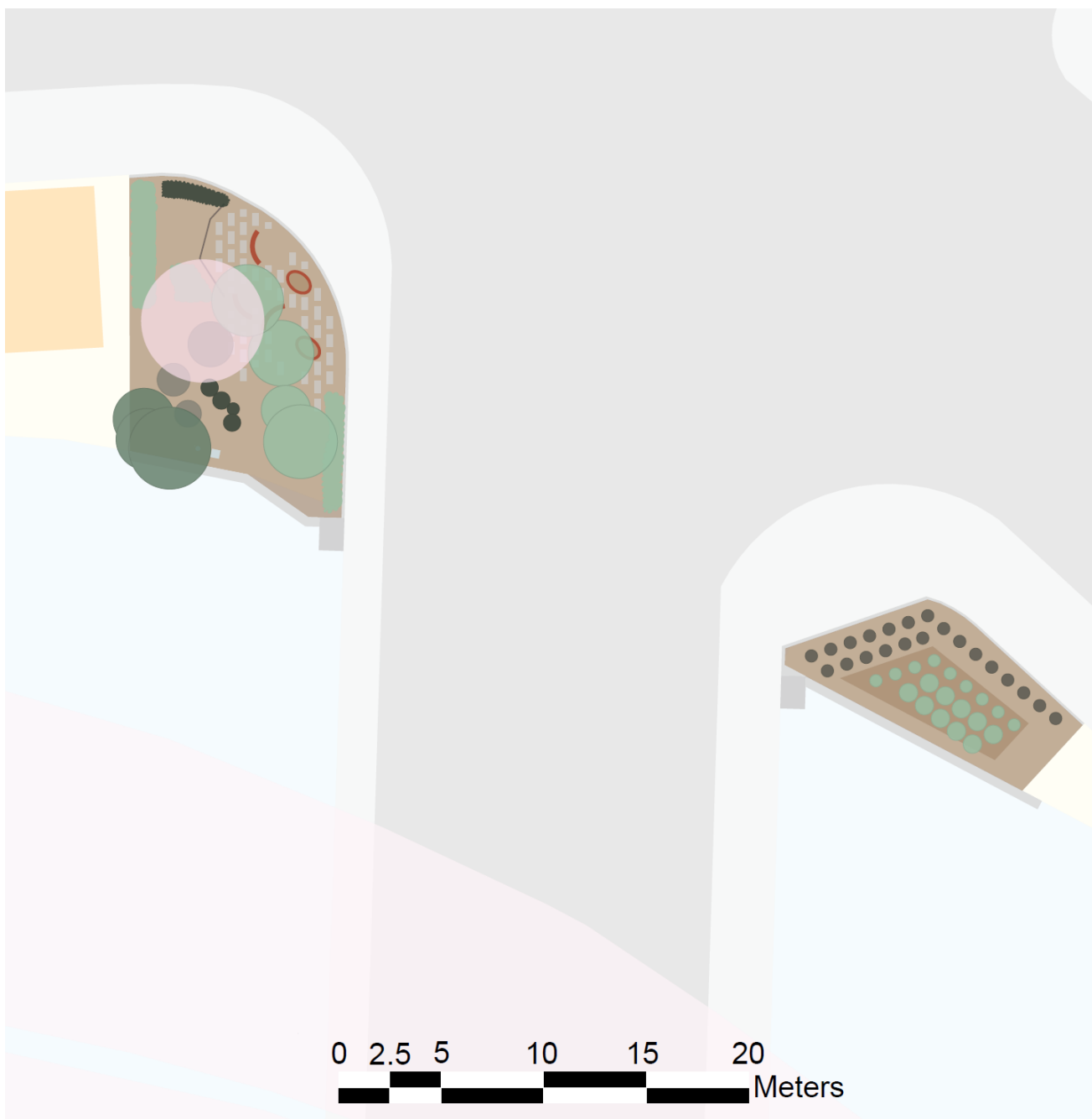
以下は現地及び現地調査の様子である。



図Ⅲ－４ 現地調査の様子

图Ⅲ—5 对象地全体图





图Ⅲ—6 対象地橋詰部拡大図

IV 利用需要について

1. 利用需要調査

近年、まちの価値の向上のためにエリア単位の広域的なネットワーク形成として、居心地が良く、歩きたくなるウォーカブルな空間づくりが全国的に行われている。全国約 300 もの自治体が名乗りを上げ、ウォーカブルまちづくりを推進している。千代田区においても「千代田区ウォーカブルまちづくりデザイン」を策定し区を挙げてウォーカブルまちづくりを進められており、特に御茶ノ水を起点として南に広がる傾向が現状である。本事業ではそれに着目し、日本橋川に係る錦橋の橋詰空間を歩行者の滞留場所として相応しい空間に創出しようとするものである。その空間創出に伴い、本調査では利用者のニーズや、当該地に必要とされているもの等の意見を街頭インタビューにて収集した。本章ではインタビューの結果と分析についてまとめる。

2. 調査概要

今回の調査では二つのアンケートを実施した。まず、まちなかに点在する滞留空間の要素を理解するために、まち中の居場所に関するアンケートを行った。その結果を用いた上で、対象地である錦橋左岸上流側橋詰空間に必要とされているものを調査した。

1) まちの中の居場所に関するアンケート

私たちの校舎である法政大学市ヶ谷田町校舎に出入りする街づくり系の学生、専門家を調査対象に、「あなたの思う滞留空間とは」というテーマで付箋を用いて意見を集めた。

2) 錦橋左岸上流側橋詰空間のアンケート

当該地周辺の街行く人を対象に、「錦橋橋詰空間にあったら嬉しいものは」(図IV-1)というテーマで街頭インタビューを行った。

調査項目としては、休憩スペース、オープンスペース(イベント、キッチンカー等)、現状維持、喫煙所に加え、その他を設け、自由な意見を求めた。喫煙所に関しては、我々の事前調査や現地調査から喫煙所の不足が原因と思われる吸殻問題が挙げられ、その問題を視野に入れアンケート項目に加えた。

また、ポイントシールの色を分けてアンケート対象者の年齢を 23 歳以下、24～60 歳、61 歳以上の

3つに分類し調査を行った。

3. 調査結果

1) まちの中の居場所に関するアンケート

調査の結果、63 の意見を収集することができた(図IV-2)。内容としてはその空間で行われる動作や活動に着目した意見が多かったが、空間構築における開放感や閉鎖感を感じさせる要素等の専門性の高い意見も見られた。より抽象的な分類に分け分析した結果、休憩スペースとしての機能を持つ空間が多く挙げられていた。次に、開放感とイベントを含んだオープンスペースの意見が多く見られた。また、植栽や日差し、風通しといった自然に関する意見も見られた。

2) 錦橋左岸上流側橋詰空間のアンケート

調査の結果(図IV-3)、23 歳以下 9 名(ピンク)、24～60 歳が 40 名(黄)、61 歳以上が 7 名(青)、計 56 人から意見を聞いた。休憩スペース 15 名、オープンスペース 25 名、現状維持 3 名、喫煙所 8 名、その他 5 名であった。その他の意見としては、皇居周辺のマラソンランナーが多いことからマラソンの聖地となる場所が良いのではないかという意見があった。具体的には

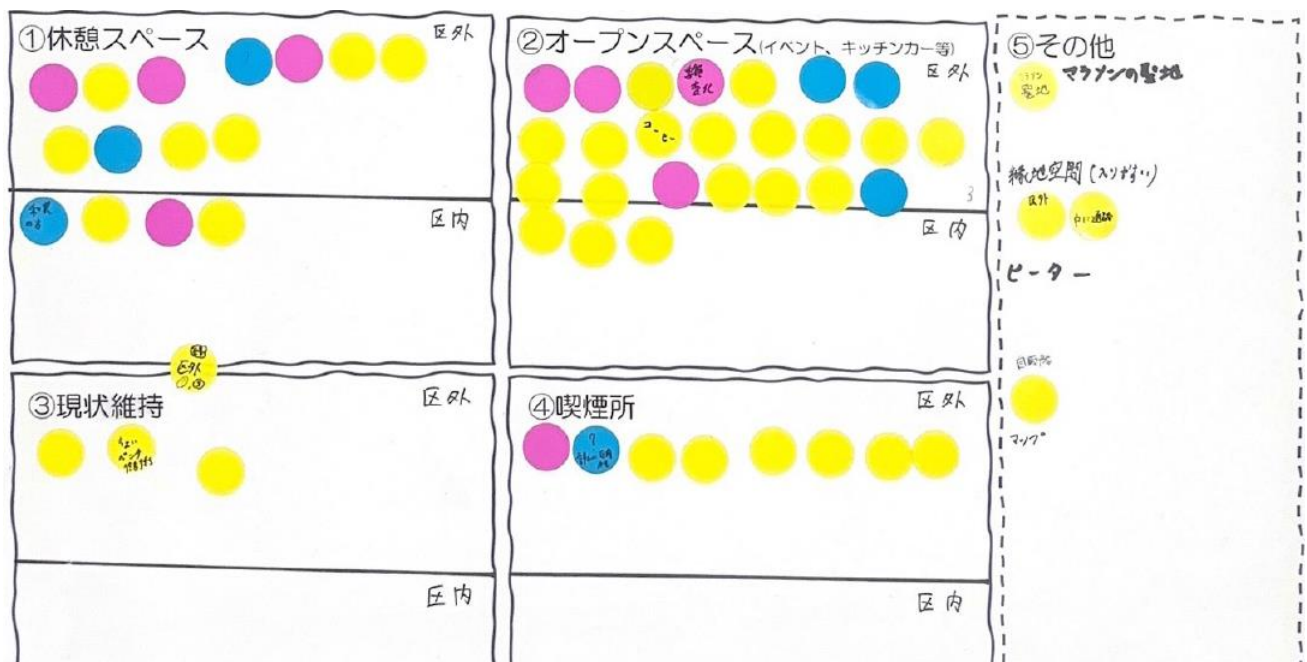
給水所やラップタイムを計測する場が挙げられた。また、緑についての意見もあり、現存するサクラやツバキを残して欲しいという意見やより明るい緑色の植栽が欲しいという声もあった。



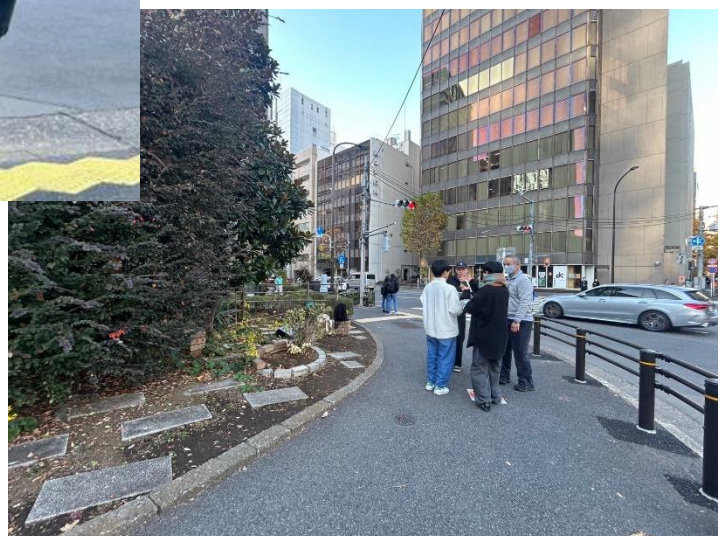
図IV-1 調査2のアンケートボード



図IV-2 調査1の結果



図IV-3 調査2のアンケート結果



図IV-4 現地アンケートの様子

V まとめと今後に向けて

当事業は以下のようにまとめられ、2024年3月17日のちよラボにて展示公開された。

橋詰空間を活用する ウォーカブル滞留空間 創出の検討と運営実験

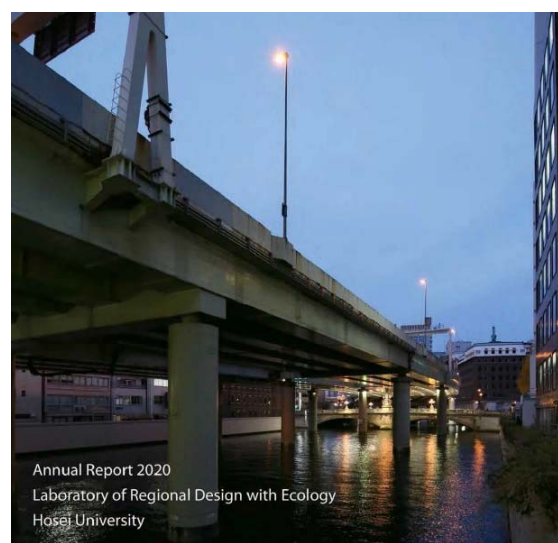
ー運営実験までは至らずー

法政大学エコ地域デザイン研究センター 高見公雄

1

0. 法政大学エコ地域デザイン研究センターとは

- ・「環境の時代」を切り開く「都市と地域の再生」のための方法を研究。
- ・前身のエコ地域デザイン研究所創設から20年目。
- ・創設者の陣内秀信名誉教授を中心にこれまで活動を継続。
- ・＜エコロジー＞と＜歴史＞を結びつける独自のアプローチ。
- ・国内外の専門家とのネットワークを形成。
- ・「テリトリーオ」の「水辺空間の研究と再生」のをテーマとして研究を展開中。



Annual Report 2020
Laboratory of Regional Design with Ecology
Hosei University

法政大学エコ地域デザイン研究センター
2020 年度報告書

2

1. 当事業の背景 ① 滞留空間への着目

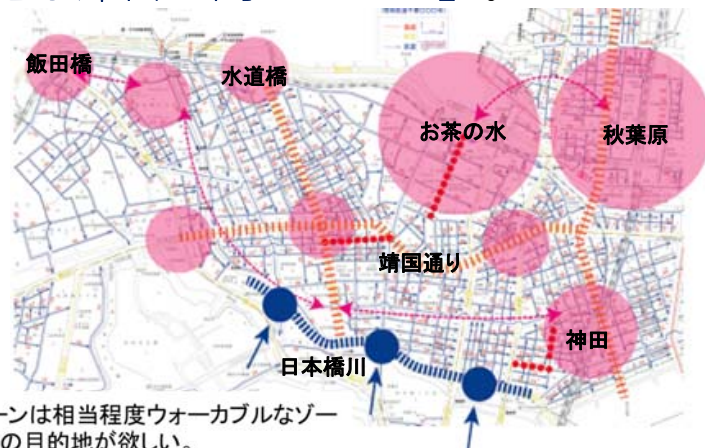
- ・ 国の提唱もあって、世はウォーカブルの大合唱。
- ・ 道路法・都市公園法の改正もあいまって、全国約300の自治体がウォーカブル推進都市として名乗り。
- ・ さて、ウォーカブルってなんだろう。みんな、そんなに歩くのが好きだっけ。
- ・ 千代田区は日本の中心。人は本当に沢山居て、多くの人が街を歩いている。
- ・ ここで求められるウォーカブル空間とは・・・
『休憩の場ともなる滞留空間ではないか』。

3

1. 当事業の背景 ②APS推進会議・・?

- ・ APS推進会議*として、2015年頃から歩行環境について着目。
- ・ 中央線各駅から靖国通り辺りまでは広幅員歩道のネットワーク等で他に類を見ないほどの歩行者のまち。
- ・ これが靖国通り以南は空間はあるものの、人影は減る、
「日本橋川沿いに快適な滞留空間があれば」。

* APS推進会議とは、日本都市計画学会連携組織である都市のパブリックスペースのあり方を考える組織。



秋葉原、御茶の水から靖国通りまでのゾーンは相当程度ウォーカブルなゾーンになっているが、その先、日本橋川方面の目的地が欲しい。

4

2. 対象地--錦橋左岸橋詰広場に着目

- ・ 2017年頃，千代田区道たる橋詰広場がよかろうと錦橋左岸橋詰広場選定したものの，実は底地は都道。
- ・ 上物整備は千代田区が行ったが現在は都に管理を戻した。
- ・ 当事業では少し迷ったが，専門家の仲介により都にお話をし
て，検討対象とさせてもらった。

滞留空間としての適所を探す
課程での検討図



図出典:APS推進会議

3. 取り組み①--実測図を作ろう！

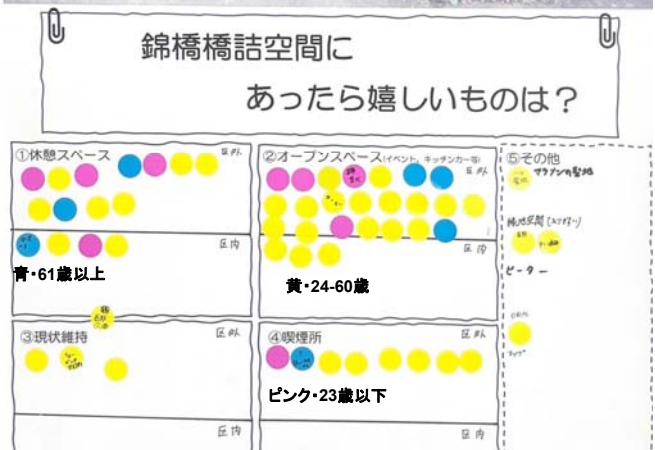
- ・ 今後何をするにも現況把握。学生と一緒に現況図を作った。



錦橋左岸橋詰広場実測図

3. 取り組み②--利用需要を探ろう！

- ・居場所って求められているのか。近くの人に聞いた。
- ・オープンスペース，休憩スペースが多く，マラソンの聖地といった意見もあった。



3. 取り組み②--利用需要を探ろう！ と今後

- ・もう一つ，大学で都市の居場所について聞いた。
- ・63の意見。開放感とイベントを含んだオープンスペース多く，植栽や日差し、風通し等も。



- ・当事業の今後。エコ研とAPS推進会議の連携により，ウォーカブル拠点としての錦橋左岸橋詰広場の活用，できれば再整備に向けて研究と活動を続けていく。

2. 今後に向けて

今年度は以上の二つの事業をとりまとめ千代田学の成果とする。その先は千代田学の枠組みを離れ、法政大学エコ地域デザイン研究センターの独自研究としつつ、既述のように APS 推進会議の枠組みと協力しつつ、社会実験さらには施設整備に向けた検討、調整等を行っていく予定である。

〔謝辞〕

本研究を進めるにあたり、特に対象地選定において戦災復興区画整理研究を進めておられる日本大学の大沢昌玄教授に的確なご助言をいただきました。またそのご紹介で都が管理する橋詰空間についての情報提供と、対象地について意見交換させて頂いた東京都第一建設事務所の村上様、本間様には貴重なご意見、ご指摘を賜りました。感謝申し上げます。

法政大学エコ地域デザイン研究所

2024 年 3 月 発行

執筆

高見公雄、富田翔晴、川添雄太、丹治寛太、谷田海渡

令和 5 年度千代田学事業

